

<研究報告>

日英語の自他交替*

—「家が建った」はいいが、The house built はダメなのはなぜか—

蔵野 学

長野県立飯山北高等学校

田中 江扶

信州大学教育学部言語教育講座

キーワード：自他交替， 外的原因， 動作主性， 自発性， 動作主の潜在化

1. はじめに

英語の特徴として、動詞が形を変えないで自動詞と他動詞の両方で使われることがあげられる。

(1) a. John **opened** the door. [他動詞]

b. The door **opened**. [自動詞]

(1a, b)にあるように、同じ open という動詞は自動詞としても他動詞としても使われる。この現象は**自他交替**と呼ばれている。一方、日本語では基本的に自動詞と他動詞で形態が異なる。

(2) a. ジョンがドアを**開けた**。[他動詞]

b. ドアが**開いた**。 [自動詞]

(2a)では「開ける」という他動詞形が使われ、(2b)では「開く」という自動詞形が使われている。また、英語は日本語よりも自他交替に対する制限が強い(例文の頭に * がついている場合は、その文が文法的に正しくなく、文としては認められないことを表す)。

(3) a. *The driver **happened** a traffic accident. [他動詞]

b. A traffic accident **happened**. [自動詞]

(4) a. He **cut** the rope. [他動詞]

b. *The rope **cut**. [自動詞]

(3)の happen の場合、(3a)のように他動詞として使うことができない。逆に、(4)の cut の場合は(4b)のように自動詞として使うことができない。しかしながら、(3)と(4)に対応する日本語の(5)と(6)は、ともに自他交替が可能である。

(5) a. 運転手は交通事故を**起こした**。[他動詞]

b. 交通事故が**起きた**。 [自動詞]

(6) a. 彼はロープを**切った**。[他動詞]

b. ロープが**切れた**。 [自動詞]

* 本稿は Kurano(2013)を修正したものである。初稿の段階で英語教育専修の大学院生である胡曉瑾氏、橋本義史氏、山浦雄介氏から貴重なご意見を頂いたことに感謝申し上げたい。また、本稿を完成させるまでに議論を重ねてくれた太田理沙、岡田佳亮、門脇恵里香、渡辺有美の各氏にも心からの感謝を捧げたい。

なぜ、英語と日本語で自他交替に対する制限が異なるのだろうか。

本論では、日英語の自他交替がともに動作主性と自発性の相関関係の観点から捉えられることを示す。さらに、英語の自他交替と日本語の自他交替の比較から、自他交替は(i)文脈などが関係する語用論、(ii)形態変化に関する形態論、(iii)語彙化に関する語彙論の3つの異なったレベルで捉えられることを示す。

2. 自他交替における動作主性と自発性

一般に自他交替という場合、動詞が形態を変えない(= 同じ形のまま)で他動詞の目的語が自動詞の主語になる現象を指す。

(7) a. John **opened** the door. [他動詞]

(目的語)

b. **The door opened.** [自動詞]

(主語)

(7a)で他動詞 *open* の目的語である *the door* が、(7b)では自動詞 *open* の主語となっている。同じく他動詞の目的語が自動詞の主語になる受身文との違いは、行為を行う動作主を表せるかどうかによる(影山(1996)参照)。

(8) a. The door **was opened** by John. [受身文]

b. *The door **opened** by John. [自動詞]

(8a)にあるように、受身文の場合は *by John* を付け加えることで「窓を開ける」という行為を行う動作主を表すことができるが、(8b)にあるように、自動詞用法の場合は *by John* を付け加えることができない¹。このことは、(7b)の自動詞用法はドアが開いたことを独立した出来事として捉えていることを示している。言い換えれば、誰か(もしくは何か)がドアを開けたことを示す場合は(7a)の他動詞用法が使われることになる。この観察に基づき、影山(1996)はある行為に対して自発性が認められるかどうか自他を決定していると仮定し、語彙意味論の観点から自他交替を分析している。しかし、自発性を語彙構造にどのように反映するにしても、自発性をどのように捉えるかは認識の問題である。本節では、自発性という概念を深く考察している丸田(1998)の分析を基に、動作主性と自発性がどのように認識されるかを考察していく。

2.1 自他交替における外的原因の認識

次の対比をみてみよう(Levin and Rappaport (1995: 79-80))。

¹ **be** 受け身と **get** 受け身 英語の受け身文には *be* 動詞を使う受け身(= *be* 受け身)と *get* を使う受け身(= *get* 受け身)があるが、両者は動作主(*by* 句)がどのように関わるかという点で違いがみられる。

(i) a. Ken **was hit** by the truck *on purpose*. [**be** 受け身]

b. Ken **got hit** by the truck *on purpose*. [**get** 受け身]

(ia, b)では、副詞句の *on purpose*(わざと)の解釈に違いがある。(ia)の *be* 受け身は「トラックの運転手(*by the truck*)がわざとケンをはねた」という解釈になるが、(ib)の *get* 受け身は「ケンがわざとトラックにはねられた」という解釈になる。つまり、*be* 受け身の方が *get* 受け身よりも動作主性が強いといえる。動作主性の違いから構文間のつながりがみえてくる可能性がある(畠山(編)(2012: 210-211))。

- (9) a. The window **broke**.
 b. Pat **broke** the window.
 (10) a. The crowd **laughed**.
 b. *The comedian **laughed** the crowd.

Levin and Rappaport (以下, L&R)が指摘しているように, (9)の break (および open, sink 等)は自他交替が可能であるが, (10)の laugh(および play, speak 等)は自他交替ができない。この対比を L&R は Smith (1970)の洞察に基づき, 外的原因(external cause)の有無という観点から説明している。例えば, (9)の break(壊れる)という出来事は, 何らかの外的原因がないと起こりえないため, 通常は外的原因が他動詞の主語として表される。つまり, (9b)の他動詞用法では主語の Pat が「窓を壊す」という出来事の外的原因となっている。さらに, L&R の分析では, (9a)の自動詞用法においても, 外的原因が特定されていないだけで, 意味的には存在していることになる。したがって, (9a)の自動詞用法では「窓が壊れる」という出来事が何らかの外的原因によって引き起こされたことになるが, それがあたかも「自発的(spontaneous)」に起こったかのような解釈を与えていることになる(丸田(1998)参照)。一方, (10)の laugh(笑う)は外的原因に引き起こされるものではなく, あくまで「笑う」という行為を行う人が内発的に行うものである。つまり, どんな外からの働きかけも「笑う」という行為を直接コントロールすることはできない。よって, (10b)のように外的原因としての主語(the comedian)を置くことはできず, (10a)の自動詞表現のみ許されることになる²。

以上のことをまとめると, 次のようになる。

- (11) i. 外的原因を特定する — 他動詞 (Pat **broke** the window.)
 ii. 外的原因を不特定化する — 自動詞 (The window **broke**.)

L&R はさらに(11ii)のように外的原因を不特定化できる条件として, 外的原因の選択が自由であることをあげている。

- (12) a. The boy **broke** the window.
 b. The earthquake **broke** the window.
 c. The window **broke**.
 (13) a. The terrorist **murdered** the senator.
 b. *The explosion **murdered** the senator.
 c. *The senator **murdered**.

(12a, b)にあるように, break は他動詞の主語(=外的原因)に人(the boy)も無生物(the earthquake)もくることができる。このように, 外的原因の選択が自由な場合は(12c)の自動詞用法が可能である。これに対して, (13a, b)にあるように, murder は他動詞の主語に人(the

² 使役構文 (10b)にあるように, laugh は他動詞用法が許されないが, 「コメディアンが観客を笑わす」という状況は普通に考えられる。この状況を英語でいう場合は, make を使った使役構文で表される。

(i) The comedian made the crowd laugh. (L&R(1995: 80)
 現実世界をどのように認識するかということ, それをどう言語として表すかは峻別して考える必要がある。

terrorist)は許されるが、無生物(the explosion)は許されない。このように、外的原因の選択に制限がある場合は、(13c)にあるように自動詞にはできない。このことから、L&R(1995: 105)は自他交替に関して、以下の一般化を提出している。

(14) **L&Rの一般化**

外的原因の選択が自由な場合に自動詞用法が可能(=自他交替が可能)となる。

(14)の一般化をより詳細に示すと(15)のようになる。

(15) **外的原因の選択が自由 → 外的原因の不特定化 → 自動詞化 → 自発性の解釈**

上述したように、「外的原因」というのは他動詞の主語として表されるため、外的原因が不特定化されるといのは、他動詞の主語を表さないことにつながる(=自動詞化)。さらに、他動詞の主語が表されない場合、外的原因が特に問題にならないことになるため、動詞が表す出来事が自然に起きたような解釈が可能となる³。

(14)の一般化は次の対比を説明できる(L&R (1995: 102, 105))。

(16) a. The boy **broke** the window. (=12a)

b. The window **broke**. (=12c)

(17) a. He **broke** his promise / the world record.

b. *His promise / The world record **broke**.

(18) a. The baker **cut** the bread.

b. *The bread **cut**.

上述したように、(16)の「窓を壊した」という場合、どのように壊したかは特定化されないため、(16a)の他動詞用法においては外的原因を表す主語が地震(the earthquake)のような無生物であっても構わない((12b)参照)。しかし、(17)のように約束(his promise)や世界記録(the world record)を破る場合は、必ず他動詞の主語が人間に限定される。つまり、外的原因の選択に制限があることになるため、(14)の一般化より、(17b)の自動詞用法は許されないことになる。さらに、(14)の一般化は(16)の break は自他交替を許すが、(18)の cut は自他交替を許さないことも捉えることができる。なぜなら、(17)の場合と同じく、cut の場合も外的原因が人間に限定されるからである。具体的にいうと、cut の場合、「鋭い刃をもつ道具で人間が切る」という意味を表す。その証拠として、L&R(1995: 103)は次の例をあげている。

(19) a. The baker / That knife **cut** the bread.

b. *The lightning **cut** the clothesline.

(19a)にあるように、cut は主語に人(the baker)だけではなく、道具(that knife)もくることができる。これは、一見、cut は外的制限の選択が自由であるかのように思えるが、道具というのは必ずそれを使う人がいることを示唆するため、他動詞 cut の主語は人間に限定されると

³ **擬人化と自発性** The stone rolled.という自動詞用法について、過去の研究では「あたかも石が自らの動きを引き起こしているように想定されている」とか「現実には石が自らの意志で動くわけではないが、あたかもそのように表現されている」といった指摘がある(影山(1996: 146))。このように、擬人化と捉えた場合、the stone は意志をもって動いていることになるため、The stone rolled.には自発性が認められなくなる。自他交替の自動詞用法を擬人化と捉えるのか、自発性と捉えるのかは、難しい問題である。

いえる。その証拠に、(19b)のような(純粋な)無生物主語(**the lightning**)は **cut** の主語にはなれない。よって、**break** とは異なり、**cut** は外的原因の選択に制限(=人間に限定)があることとなるため、(14)の一般化より、(18b)の自動詞用法は許されないことになる。

しかし、L&R の(14)の一般化に問題があることが丸田(1998)で指摘されている。まず、外的原因の選択に制限がないものでも、自動詞化ができない例があげられている。

(20) a. The avalanche **destroyed** several houses.

b. *Several houses **destroyed**.

(21) a. The frost **killed** all the flowers.

b. *All the flowers **killed**. (丸田 (1998: 94))

(20a)および(21a)にあるように、**destroy** と **kill** はともに無生物(**The avalanche** および **The frost**)が主語になることができるため、外的原因の選択に制限がないといえる。しかし、(20b)および(21b)にあるように、両者ともに自動詞用法は許されない。つまり、(14)の一般化に反して、外的原因の選択が自由な場合でも自動詞用法ができない場合があることになる。

さらに、丸田では不特定化という概念にも問題があることが指摘されている。

(22) a. The wind **cleared** the sky.

b. The sky **cleared**.

(23) a. The waiter **cleared** the table.

b. *The table **cleared**. (L&R (1995: 104))

L&R は上の対比を(14)の一般化から説明している。すなわち、(22)の **the sky**(空)の場合と違って、(23)の **the table** (テーブル)の場合は人がきれいにするものであるため、外的原因の選択に制限(=人間に限定)があることになる。よって、(14)の一般化より、(23b)の自動詞用法は許されないことになる。しかしながら、丸田が指摘しているように、動詞 **clear** は形容詞 **clear** から派生されたものであるため、「きれいになる」という結果状態が特定されているのであって、「どのようにきれいにするか」は不特定であるといえる。その証拠に、テーブルのほこりが風で飛ばされてきれいになるという可能性も考えられる。このように、(23)の場合でも **clear** は外的原因を特定しないとみなすこともできるため、L&R の分析における「不特定化」という概念の定義は曖昧であるといえる。

以上のことから、丸田は外的原因の不特定化という L&R の分析は不十分であるとして、自他交替にとって重要なのは、外的原因の関わり方であると主張している。具体的には、Talmy (1985)の洞察に基づき、外的原因の関わり方には2種類あるとしている。

(24) a. The avalanche **destroyed** several houses. (=20a)

b. The wind **opened** the door.

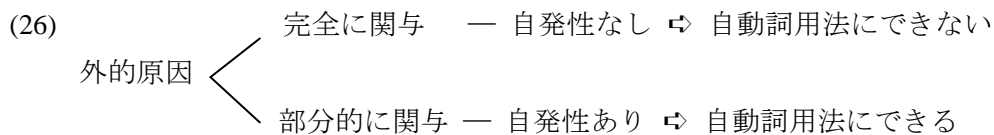
(24a)の場合、主語の雪崩(**The avalanche**)は家の崩壊に対して完全に責任をもっているため、**destroy** というのは独立して成立する出来事とは捉えられない。この場合、自動詞用法は許されない (*Several houses **destroyed**. (=20b))。一方、(24b)の場合は、主語の風(**The wind**)はドアに動力を与えているだけで、後はドアがもつ開閉機能によって開いたことになる。つ

まり, **open** というのは独立して成立する出来事としても捉えることができる。この場合は自動詞用法が可能となる (**The door opened.** (=1b))。このように, 動詞が表す出来事に対して, 外的原因が完全に責任をもつ場合と, あくまで引き金として部分的に関与する場合の2種類あることになる。この観察に基づき, 丸田は自他交替に関して, 以下の一般化を提出している。

(25) 丸田の一般化

動詞が表す出来事に外的原因が部分的に関与する場合に自動詞用法が可能(=自他交替が可能)となる。

(25)をより具体的に示すと(26)のようになる。



(26)が表しているのは, 「動詞が表す出来事が, あるきっかけ(=外的原因)によって活性化され, 「自然に」起きているとみなされる場合に, 自他交替が可能となる」ということである。例えば, *John rolled the ball.* (ジョンはボールを回した)では, Johnは無理やりボールを回したのではなく, あくまでボールに力を加えて回るきっかけを与えたに過ぎない。つまり, **roll** という回転運動を成り立たせているのはあくまで **the ball** であって John ではない。この場合, 「ボールが回る」という行為には自発性があることになるため, *The ball rolled.* という自動詞用法が成立する(丸田(1998: 99))。これに対して, 本節で見えてきた自動詞用法にできない例は, すべて自発性がないことがわかる。一例として, L&R の分析ではうまく説明できないと指摘された(22)と(23)の対比を再掲する。

(22) a. **The wind cleared the sky.**

b. **The sky cleared.**

(23) a. **The waiter cleared the table.**

b. ***The table cleared.**

この対比は丸田の(26)の分析に基づくと, 問題なく説明できる。(22a)の **the wind** は「空がきれいになる」ことに対してきっかけを与えるだけで, 部分的にしか関与していない。つまり, **the sky** は自然にきれい(clear)になることができるため, (22b)の自動詞用法が可能となる。これに対して, (23a)の **the waiter** は「テーブルがきれいになる」ことに対して最後まで責任があり, 完全に関与している。つまり, **the table** は自然にはきれいになることができないため, (23b)の自動詞用法は許されない⁴。

⁴ 他動詞と意図性 英語と日本語ともに, 財布を落とした状況を他動詞文として表すことができる。

(i) a. 太郎は昨日財布を落とした。

b. **Taro dropped his wallet yesterday.**

しかし, インドネシア語では(i)のような他動詞文を使った場合, 「太郎が意図的に, わざと財布を落とした」という風に解釈される(西村・野矢(2013: 121))。つまり, インドネシア語は日英語に比べて, 他動詞文の意図性が強いといえる。自他交替に意図性がどのように関係してくるのかは, 興味深いテーマである。

本論でも、この丸田の(26)の分析は基本的に正しいと考えるが、(26)の洞察を語彙構造に組み込み、自他交替を語彙意味論の観点からのみ捉えようとしている分析には問題があると考えられる。次節では、(26)の洞察はあくまで認識の問題と捉えた上で、自他交替を自発性と動作主性の相関関係から分析する。

2.2 自他交替における自発性の認識

前節で見たように、動詞は(i)他動詞用法のみ、(ii)自動詞用法のみ、(iii)両方可能(=自他交替可能)の3つに分けられる。以下では、この3つの区別が動作主性と自発性の観点から捉えられることを、2.1節のデータを中心に見ていく(以下、前節までの例文番号を使用する)。

まず、他動詞用法のみのパターンから見ていく。

(20) a. The avalanche **destroyed** several houses.

b. *Several houses **destroyed**.

2.1節で見たように、(20a)では、主語の雪崩(The avalanche)は家が崩壊するまで完全に関与している。つまり、destroy というのは独立して成立する出来事とは捉えられない。この場合、(20b)の自動詞用法は許されない。同様の説明が以下の例にも当てはまる。

(13) a. The terrorist **murdered** the senator.

c. *The senator **murdered**.

(21) a. The frost **killed** all the flowers.

b. *All the flowers **killed**.

(13a)では、主語のテロリスト(the terrorist)が政治家(the senator)を殺す(murder)まで完全に関与しているため、murder という行為はそれを引き起こす外的原因なしには成り立たないことになる。よって、(13c)の自動詞用法は許されない。同じく、(21a)でも、主語の霜(the frost)は花(the flowers)が枯れる(kill)まで完全に関与しているため、(21b)の kill の自動詞用法は許されない。さらに、動詞 cut が他動詞用法しかもたないことも、同じように捉えられる。

(18) a. The baker **cut** the bread.

b. *The bread **cut**.

パン(the bread)は勝手に切れることはなく、切れるまで切る(cut)という動作を行う必要がある。つまり、主語のパン屋(the baker)は cut という行為に完全に関与しているため、(18b)の自動詞用法は許されない。

このように、外的原因が完全に関与している場合は自発性がないことになるため、他動詞用法しか許されないことになる((26)参照)。主語の意図性(=主語が人間か無生物か)に関係なく、「外的原因の関与が強い」ことを動作主性が強いと定義すると、**動作主性が強い場合に他動詞用法が使われる**と考えることができる。

次に、自動詞用法しか許されないパターンについて見ていく。本分析によれば、動作主性が強ければ強いほど、自発性は弱くなることになるが、逆に言えば、自発性が強い場合は動作主性は弱いことになる。動作主性が弱いということは外的原因が主語に置けないことになるため、他動詞用法は許されず、自動詞用法しかないことになる。

(10) a. The crowd **laughed**.

b. *The comedian **laughed** the crowd.

2.1 節で見たように、(10)の laugh(笑う)の場合は、どんな外からの働きかけも「笑う」という行為を直接コントロールすることはできず、あくまで「笑う」という行為を行う人が自発的に行うものである。つまり、laugh は自発性が強く、動作主性が弱いことになる。よって、(10b)のように外的原因として他動詞の主語(the comedian)を置くことはできないため、(10a)の自動詞用法のみ許されることになる。このように、**自発性作が強い場合に自動詞用法が使われる**と考えることができる。

このように見てくると、自他交替を許すパターンというのは、動作主性と自発性の両方を表せるときであると結論できる。

(1) a. John **opened** the door.

b. The door **opened**.

(1a)では、主語の John がドアを押したり、カギを回したり等の外からの働きかけを行っている。たとえ自動ドアの場合でも John がドアの前に立つ等の働きかけが必要になる。このように、open には動作主性があるため、(1a)の他動詞用法が可能となる。その一方で、ドアは動力を与えるだけで、後はドアがもつ開閉機能によって開くことができる。つまり、ドアが開くというのは独立した出来事としても捉えることができる(2.1節参照)。よって、open の場合は自発性もあることになるため、(1b)の自動詞用法も可能となる。open に動作主性と自発性が両立できることは、以下の例からも支持される。

(27) The door opened at a touch. (影山(1996: 145))

(27)の下線部の at a touch(さわっただけで)という副詞句は、動作主がいること(=動作主性があること)と同時に、ドアが開くきっかけを与えただけで、ドアが開いたという出来事は独立して起こったこと(=自発性があること)も含意している。

同様の説明が同じく自他交替を許す break にも当てはまる。2.1 節で *The window broke*. という自動詞用法が可能であることをみたが、これは窓が壊れるという性質をもっているからである。つまり、「窓が壊れる」というのは独立した出来事としても捉えることができるといえる。このことは以下の例からも支持される。

(28) Peter broke the dog.

(28)は丸田(1998: 111)で紹介されている Fillmore (1968)の例であるが、Fillmore によれば、(28)の the dog は凍っている犬か、犬の形をした置物でなければならない。つまり、break は目的語に砕けやすい物体を選択することがわかる。言い換えれば、break の目的語は壊れるという性質をもっていることになる。このことは、break は独立した出来事としても捉えることができる、自発性をもつものであることを示している。

以上のことから、**動作主性と自発性が両方できる場合に自他交替が使われる**と結論できる。さらに、「両立できる」ための条件としては、動作主が部分的に関与していることがあげられる((26)参照)。この「部分的に関与」というのをより具体的にいうと、動詞が表す

出来事を活性化するということになる。活性化するだけなので、**動作主を潜在化**して明示しない(=自動詞用法にする)ことで自発性を表に出すこともできると考えられる(cf. 丸田(1998))。これを図示すると、以下ようになる。

- (29) i. 動作主 ———— **活性化** —————> 自発行為 = 他動詞用法
 John opened the door (the door opened) *John opened the door.*
- ii. **動作主** ———— **潜在化** —————> 自発行為 = 自動詞用法
 John opened the door the door opened *The door opened.*

(29i)のように、動詞が表す出来事を活性化した動作主を表すときは他動詞用法になり、(29ii)のように、動作主を潜在化すると、どのように活性化したかも問題にならなくなるため、「開いた」という結果のみを示す自動詞用法になる⁵。

このように、自他交替の可能性は動作主性と自発性という観点から捉えることができるが、これらの概念は語彙意味論のレベルの問題ではなく、あくまで認識の問題であると考えられる。その証拠の1つとして、**break**は自他交替を許すが、**destroy**は自他交替を許さないことがあげられる。なぜなら、両者はともに状態変化を表すため、語彙構造は同じはずであるからである。そのため、両者が自他交替に関して違う振る舞いを示すことに対して、語彙構造の違いを示すことになるが、その違いは結局、**break**と**destroy**をどう捉えるかという認識の違いに還元される。さらに、(28)で見たように、**break**が目的語に砕けやすい物体を選択することは明らかに**break**をどう捉えるかという認識の問題である。たとえ、そのことを語彙的に取り入れたとしても、**break**をどう捉えるかという認識を踏まえた上での「後付けの説明」に過ぎない。

次節では、動作主性と自発性という概念が語彙意味論の問題ではなく、認識の問題であることを示す。さらに、英語の自他交替と日本語の自他交替の比較から、自他交替は(i)文脈などが関係する語用論、(ii)形態変化に関する形態論、(iii)語彙化に関する語彙論の3つの異なったレベルで捉えられることを示す。

3. 自他交替における認識と言語化の関係

2節で見たように、自他交替ができるかどうかは動作主性と自発性という観点から捉えることができる。

⁵ **動詞が形態を変えない日本語の自他交替** 日本語においても、少数ではあるが、英語のように動詞が形を変えないで自他交替が可能なものがある。例えば、「開く(ひらく)」や「はねる」などがあげられる。

(i) a. 水門を開く。 / 水門が開く。
 b. 泥をはねる。 / 泥がはねる。(須賀(2000: 125))。

(ia)では、人がスイッチを入れるなどの操作をして水門をひらく場合は他動詞用法になるが、操作をした後は、「ひらく」というのが水門自体の動きとしても捉えられるため、自動詞用法も可能となる。同様に、(ib)においても、人や車などが泥をはねることを表す場合は他動詞用法になるが、一度泥をはねれば、後は自然に泥がはねるとも捉えられるため、自動詞用法も可能となる。このように、動詞が形を変えずに自他交替を起こす場合は、日英語で共通の認識が働いていると考えられる。

(30) i. 動作主性が強い → 他動詞用法のみ

(例：The avalanche **destroyed** several houses. / *Several houses **destroyed**.)

ii. 自発性が強い → 自動詞用法のみ

(例：The crowd **laughed**. / *The comedian **laughed** the crowd.)

iii. 動作主性と自発性が両方できる → 自他交替が可能

(例：The boy **broke** the window. / The window **broke**.)

2 節で述べたように、過去の研究ではこの動作主性と自発性を語彙概念構造に取り込む分析が主流をなしているが、これらの概念は基本的には現実世界をどう認識するかという問題であることを本節でみていく。その上で、自他交替における認識と言語化の関係についても考察する。

3.1 語用論的要因

動詞が表す出来事に自発性を認めるかどうかは認識の問題であると考えられる根拠の1つ目として、同じ語が文脈によって自他交替ができなくなることがあげられる。もう一度、2.1 節で見た clear の例を再掲する。

(22) a. The wind **cleared** the sky.

b. The sky **cleared**.

(23) a. The waiter **cleared** the table.

b. *The table **cleared**.

上の例文では同じ clear という動詞が使われているにもかかわらず、(22b)の自動詞用法は可能であるが、(23b)の自動詞用法は許されない。この理由として、L&R は空(the sky)は自然にきれいになるため自動詞用法が許されるが、テーブル(the table)がきれいになるには必ず人間の力が必要であるため自動詞用法が許されないとしている。その上で、「テーブルをきれいにするには必ず人間の力が必要である」というのは我々がもつ一般知識(our knowledge of the world)であるとしている。この L&R の観察は、多くの例に当てはまる。

(17) a. He **broke** his promise / the world record.

b. *His promise / The world record **broke**.

(31) a. John **opened** the letter.

b. *The letter **opened**. (丸田(1998: 119))

2.1 節でみたように、break は基本的に自他交替を許す動詞であるが、(17b)の自動用法は許されない。これは、「約束や世界記録を破る(break)という行為は必ず人間によって引き起こされる」という一般知識が働くからである。同様に、open は基本的に自他交替を許す動詞であるが、(31b)の自動用法は許されない。これは、「手紙が単独で開くようなことはない」という一般知識が働くからである。このように、自発性を認めるかどうかは、根本的には現実世界をどう認識しているかという問題であることがわかる。

2 目として、文脈操作によって自他交替の可能性が左右されることがあげられる。

(32) a. The dressmaker **lengthened** the skirt.

b. *The skirt **lengthened**.

L&R(1995: 105)で指摘されているように、スカート(the skirt)の長さを調整するには必ず人間の力が必要であるため、(32b)の自動詞用法が許されないことになる。これに対して、日が長くなるのは、自然の成り行きで起こることであるため、lengthen を使った自動詞用法が可能となる。

(33) The days **lengthened**.

しかしながら、日が長くなるというのは人間の力の及ばないことであるため、(32)のスカートの場合とは異なり、他動詞用法が許されないことになるが、SF 小説のような文脈だと他動詞用法が許される。

(34) The mad scientist **lengthened** the days.

同じような例として、L&R(1995: 115)は Smith(1970)で指摘された burp の例をあげている。

(35) a. The doctor **burped**.

b. *The nurse **burped** the doctor.

(36) a. The baby **burped**.

b. The nurse **burped** the baby.

(35b)の他動詞用法が許されないことからわかるように、ゲップをする(burp)というのは身体内部の生理現象であるため、自発的に生ずるものである。そのため、(35a)の自動詞用法しか許されない。しかし、(36)のように赤ちゃん(the baby)の場合は身体が発達していなく、なかなか自発的にゲップ行為を引き起こすことができないため、背中をたたいてあげるなどの外からの作用が必要となる。そのため、(36b)の他動詞用法も許されることになる。L&Rはこのような例は突発的に起こる造語(sporadic coinage)として例外的に扱っているが、文脈操作で自他交替が可能になるというのは事実である上に、文脈操作で自他交替が可能となるのは普通に見られる現象であるため、あえて例外的な扱いにする根拠はないといえる(cf. 丸田(1998))。むしろ、(34)のような特殊な文脈にも影響を受けるという事実は、自他交替の可能性は基本的には現実世界をどう認識するかによることを示している。

3 つ目として、自他交替の可能性は程度の問題であることがあげられる。まず、丸田(1998: 78)で紹介されている中右(1994)の観察を見てみよう。

(37) a. The door **opened**.

b. The door **opened** by itself.

2 節で見たように、(37a)の自動詞用法ではドアが開いたという出来事は独立して起こったことを表している。つまり、(37a)の open は自発性が強いことになる。しかし、by itself(勝手に)という副詞句がついた(37b)は、(37a)に比べて open の自発性が明らかに強く感じられる。このことは、自発性の強さというのは程度の問題であることを示している。さらに、丸田では同様の観察が紹介されている。

(38) The glass **broke**.

(i) The glass broke itself.

(ii) The glass was broken.

2節でみたように、(38)の break の自動詞用法は自発性を表す。しかし、Davidse (1992)で指摘されているように、(38)には、「自然に壊れた」という(i)の解釈と「誰かによって壊された」という(ii)の解釈があり、どちらの解釈になるかは文脈によって決められる。このことは、自発性が強いといっても、動作主性が完全にはないわけではないことを表している。このように、自発性の強さというのが程度の問題であるということは、語彙の情報として固定されたものではなく、文脈等に応じて柔軟に認識されるものであることを示している⁶。

3.2 形態変化と語彙化

1節でみたように、日本語は基本的に語の形態を変えることで自他交替を起こすが、日本語においても動作主性と自発性が両立できると認識される場合に自他交替が可能となる。

(39) a. 太郎がロープを切る。

b. ロープが切れる。

ロープは誰かが切るという動作主性ととも、自然に切れるという自発性ももち合わせているため、(39)のように「切る」／「切れる」の自他交替が可能となる。しかし、英語の cut と同じく、動作主性が強い場合には「切る」／「切れる」の自他交替はできない(cf. (18))。

(40) a. 駅員が切符を切る。

b. *切符が切れる。 (須賀(2000: 121))

(40a)の「切符を切る」というのは、必ず人(=駅員)がやる行為である。この場合、動作主性が強いと認識されるため、(40b)の自動詞用法(「切れる」)は許されない。さらに、「切る」に近い意味をもつ「きざむ」も自他交替が許されない。

(41) a. 肉をきざむ。

b. *肉がきざまる。 (須賀(2000: 119))

須賀が指摘しているように、「切る」とは異なり、「きざむ」は「刃物で細かく切る」というように切り方が特定されるため、動作主の存在を捨象することが難しい。つまり、「きざむ」は動作主性が強いと認識されるため、(41b)の自動詞用法が許されないことになる⁷。

⁶ 「が／を」交替 日本語では、願望を表す「～たい」が動詞につく場合に目的格の「を」が主格の「が」と交替可能な「が／を」交替という現象がある。

(i) 僕は映画 {を／が} 見たい。(cf. 僕は映画 {を／*が} 見た。)

しかしながら、「殺す」のような動詞の場合は「が／を」交替ができない。

(ii) なぜ、おれ {を／*が} 殺したいんだ。(庵(1995: 60))

(ii)の「殺す」のように、目的語に対する働きかけが強い動詞の場合は主格の「が」は使いにくいとされている(cf. 庵(1995))。しかし、働きかけの強さという程度の問題が、動詞「殺す」の語彙情報として取り込まれるべきなのかという根本的な問題がある。

⁷ **イディオムと自他交替** 「火ぶたを切る」という場合の「切る」も自他交替ができない。

(i) a. 戦いの火ぶたを切る。

b. *戦いの火ぶたが切れる。(cf. 戦いの火ぶたが切られる。)

「火ぶたを切る」はイディオムであり、「戦いを開始する」という行為の意味を表すため、(ib)の自動詞用法が許されない。イディオム的な意味まで動詞の意味に組み込むべきかは、議論を要するところである。

しかし、この形態変化による自他交替は、動詞が表す出来事の自発性が弱いと思われる場合にも動作主性を潜在化できるという特徴ももつ(1節の(5)を再掲)。

(5) a. 運転手が事故を起こす。

b. 事故が起きる。

事故というのは何かしらの原因があって起こるものであると認識できるため、事故の原因を主語におく他動詞文の(5a)が可能となる。一方、事故は自然には起こらないものであると認識されるため、自動詞用法は許されないと予測されるが、(5b)にあるように「起きる」という自動詞用法が可能である。これは、事故がどのように起きたかがわからなくても、事故が起こった結果(=事故現場)が存在しているためであると考えられる。つまり、**結果状態が残っている**場合に、形態変化による自他交替が可能になるといえる。事実、このパターンの自他交替は日本語によく見られる。

(42) a. 新しい家を建てる。

b. 新しい家が建つ。

(43) a. みかんをむく。

b. みかんがむける。

(42a)の「建てる」や(43a)の「むく」に共通しているのは、動詞が表す行為や出来事の結果が残っているということである。前者の場合は建てた結果として家が存在しているし、後者の場合も皮をむいた結果として食べられる状態になったみかんが存在している。このように、結果状態が残っている場合には、(42b)の「建つ」や(43b)の「むく」という自動詞用法が可能になる。よって、以下の一般化が成り立つことになる。

(44) 形態変化による自他交替は、自然には起こらないと認識される場合においても、結果状態を独立して存在していると捉えることを可能にする操作である。

(44)の一般化は、形態変化による自他交替をもたない英語においては、(42b)や(43b)に対応する自動詞用法が許されないことから支持される(影山(1996: 141))⁸。

(45) a. *A new house built. (cf. 新しい家が建つ。)

b. *The orange peeled. (cf. みかんがむける。)

以上のことをまとめると、日英語ともに認識レベルでは自他交替の捉え方は基本的に同じであるといえる。つまり、前提となる動作主を潜在化することで、動詞が表す出来事が自発的に起こったと認識される場合に自他交替が成り立つことになる。ただし、日本語の場合は形態変化による自他交替も可能であるため、動詞が表す出来事が自発的に起こった

⁸ 状態変化と作成 「やける」と bake はともに状態変化と作成の2つの意味を表すことができるが、作成の意味の場合、日英語で自他交替の可能性に差が出る(cf. 影山(1996: 193))。

(i) a. She baked the potatoes. (ポテトを焼いた。)/ The potatoes baked. (ポテトが焼けた。) [状態変化]
b. She baked a cake. (ケーキを焼いた。)/ *A cake baked. (ケーキが焼けた。) [作成]

(ia)のように「ポテトに火が通る」という状態変化の意味を表す場合は、日英語ともに自他交替が可能であるが、(ib)のように「ケーキを焼いて作った」という作成の意味を表す場合は、英語では自他交替が許されない。このように、動詞が同じ意味を表すにもかかわらず、日英語で自他交替の可能性に差が生じる例をどのように分析するかは、今後、さらに追及する必要がある。

と認識できない場合でも、結果状態が存在しているという条件を満たせば自発性があると捉えることも可能となる。つまり、認識は同じでも、形態変化による自他交替の有無によって、日英語の違いが出てくることになる⁹。これを図示すると、次のようになる(cf. (29))。

(46)	動作主	————	潜在化	————→	自発行為	=	自動詞用法
	John		opened the door		(the door opened)		<i>The door opened.</i>
	John	built the house	(*the house built)	* <i>The house built.</i>
	太郎が		窓を開けた		(窓が開いた)		窓が開いた
	太郎が		家を建てた		(家が建った)		家が建った

次に、英語の happen と cut が自他交替を起こさない理由についてみていく((3)と(4)を再掲)。

(3) a. *The driver **happened** a traffic accident. (cf. 運転手が事故を**起こす**。(=(5a))

b. A traffic accident **happened**.

(4) a. He **cut** the rope.

b. *The rope **cut**. (cf. ロープが**切れる**。(=(39b))

認識レベルにおいては、言語間で差があるとは思えない。つまり、英語話者も交通事故(traffic accident)に原因があることや、ロープ(the rope)が自然に切れる場合があることを認識できるはずである。よって、(3a)の happen の他動詞用法と(4b)の cut の自動詞用法が許されないのは、語彙化が絡むと考えられる。

(47) a. The driver **caused** a traffic accident. (cf. (3a))

b. A traffic accident **happened**.

(48) a. He **cut** the rope.

b. The rope **snapped**. (cf. (4b))

(47a)にあるように、交通事故の「原因」となる動作主を明示する場合は動詞 cause(引き起こす)が使われる。これに対して、(47b)の happen は事故がどう引き起こされたかは関係なく、あくまで交通事故が起こったという「結果」のみを表している。つまり、happen は交通事故を独立した出来事と捉えている、自発性の強い動詞であることになる。このように、happen は「結果」部分のみが組み込まれている(=語彙化されている)動詞であるため、他動詞用法が許されないことになる(cf. 丸田(1998))。同じような語彙化は、(48)の cut にも見

⁹ 形態変化を起こす英語の自他交替 古英語の名残りで、英語においても、数は少ないが、母音変化によって自他交替を示すものもある。具体例としては、lie-lay, rise-raise, fall-fell などがあげられる。興味深いことに、このパターンは日本語の形態変化による自他交替と同じく、動詞が表す出来事が自発的に起こったと認識できない場合でも、結果状態が存在しているという条件を満たせば自発性があると捉えることを可能にする。

(i) a. I'm going to **lay** the cards on the table.

b. The cards **lie** on the table.

(ia)で他動詞 lay が使われているように、カードは人が置くものである。しかしながら、カードが置かれた結果、カードがテーブルに存在しているため、(ib)の自動詞 lie を使った文が可能となっている。日本語の形態変化による自他交替と英語の音韻変化による自他交替には、同じ認識の仕方が働いていると考えられる。

られる。(48b)にあるように、ロープが切れたという「結果」のみを表す場合は動詞 **snap** が使われ、ロープを切った「原因」を明示する場合は(48a)の **cut** が用いられる。つまり、**cut** は「原因」部分を組み込んだ動作主性の強い動詞であるため、自動詞用法が許されないことになる¹⁰。

(49)

表 1: 語彙化

動作主性	自発性
The driver caused a traffic accident.	A traffic accident happened .
He cut the rope.	The rope snapped .

英語には日本語のような形態変化による自他交替はないが、(49)にあるように、動作主性と自発性を異なる語が「分担」して表す語彙化が起こっているため、自他交替に関して、日英語で違いが出てくる場合があることになる。

4. まとめ

本論では自他交替の可能性は動作主性と自発性をどう捉えるかという認識の問題であることを示した。その上で、動作主性と自発性を別々に語の中に組み込み、違う語として表す語彙化の例も示したが、自他交替が文脈に左右されることや動作主性や自発性といった概念が程度の問題であることを考えると、自他交替は基本的には認識の問題であるといえる。自他交替の可能性は冠詞 a(n) の使用と同じ認識に基づいていると考えられる。冠詞がつくかどうかは、名詞をまとまりのあるものと捉えるかどうかに関係している。つまり、固体性が強い場合は a(n) がつき、弱い場合は a(n) がつかないことになるが、固体性の強さというのは、文脈に依存する。例えば、抽象名詞の **knowledge** は固体性が弱いため、無冠詞で使われる(例: anxiety for **knowledge** (知識欲))。しかし、具体的な知識を表す場合は**固体性が強いと認識される**ため、冠詞がつく(例: **a knowledge** of English (英語の知識))。これに対して、**information** はどんな場合でも冠詞がつかない(例: ***a useful information** about the organization(組織に関する有益な情報))。つまり、**information** は固体性がないことが語に組み込まれている(=語彙化されている)ことになる(畠山(編)(2011, 2012)参照)。よって、冠詞の有無と自他交替の可能性の特徴は以下のようにまとめられる。

¹⁰ **類義語と動作主性** heal と cure はともに「病気やけがを治す」ことを意味するが、両者は自他交替に関して違いがみられる(影山(1996: 158-159))。

(i) a. The doctor **healed** the wound. / The wound **healed**.

b. The doctor **cured** the patient. / *The patient **cured**.

(i)の対比にあるように、heal は自他交替が可能であるが、cure は自動詞用法が許されない。これは、cure という動詞はもともと「(人)気遣う」という意味の 'care' を語源にもつことからわかるように、動作主性が組み込まれた語といえる。単に意味が似ているというレベルから、動作主性や自発性といった、より抽象度の高い概念から語を分析する必要がある。

(50)

表 2: 自他交替の可能性と冠詞の有無

	自他交替	冠詞(a(n))
関係する概念	動作主性／自発性	固体性
文脈に依存	The window broke . *His promise broke .	anxiety for knowledge a knowledge of English
語彙化	*The rope cut . (cut は動作主性のみ表す)	* a useful information about it (information は固体性を表さない)

The window broke. という場合、その原因を捨象して、「窓が壊れる」ことを自発した出来事とみなしている。また、**a knowledge of English** という場合は、形のない「知識」を固体とみなしている。このように、言語化の背後にはそれを可能にする認識の仕組みが存在する。その認識の仕組みを解明することが、言語現象を捉える上で重要となるといえる。本論では、自他交替の背後にある認識の仕組みを考察したが、そこにどのような制約や条件が課せられるかを明らかにすることが、今後の研究課題である。

文 献

- Davidse, Kristin (1992) Transitivity/ergativity: the Janus-headed grammar of actions and events. In *Advances in systemic linguistics*, eds. Martin Davies and Louise Ravelli, 105-135. London: Frances Pinter.
- Fillmore, Charles (1968) The case for case. In *Universals in linguistic theory*, eds. E. Bach and R. T. Harms, 1-88. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- 畠山雄二(編) (2011) 『大学で教える英文法』 東京: くろしお出版.
- 畠山雄二(編) (2012) 『くらべてわかる英文法』 東京: くろしお出版.
- 庵功雄 (1995) 「ガ～シタイとヲ～シタイー 直接目的語の格標示のゆれ ー」 宮島達夫・仁田義雄(編) 『日本語類義表現の文法(上)ー単文編ー』 53-61. 東京:くろしお出版.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論』 東京: くろしお出版.
- Kurano, Manabu (2013) Comparison of transitivity alternation in English and Ga-O conversion in Japanese, *Graduation thesis*, Shinshu University.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the syntax-lexical semantic interface*. Cambridge, MA: MIT Press.
- 丸田忠雄 (1998) 『使役動詞のアナトミーー語彙的使役動詞の語彙概念構造』 東京: 松柏社.
- 中右実 (1994) 『認知意味論の原理』 東京: 大修館書店.
- 西村義樹・野矢茂樹 (2013) 『言語学の教室』 東京: 中央公論新社.
- Smith, Carlota S. (1970) Jespersen's 'move and change' class and causative verbs in English. In

日英語の自他交替

Linguistics and literary studies in honor of Archibald A. Hill. Vol.2: descriptive linguistics,
eds. M. A. Jazayery, E. C. Polomé, and W. Winter, 101-9. The Hague: Mouton.

須賀一好 (2000) 「日本語動詞の自他対応における意味と形態との相関」 丸田忠雄・
須賀一好(編) 『日英語の自他の交替』 111-131. 東京: ひつじ書房.

(2014年1月21日 受付)
(2014年2月13日 受理)